盲学校に近接した公園の分析と評価に関する研究

A Study on the Analysis and Evaluation of the Park Adjacent to the School for the Blind

永松 義博* 阿部 香織* 岩渕由生子*
Yoshihiro NAGAMATU Kaori ABE Yukiko IWABUCHI

摘要：盲学校に近接した公園を視覚障害者がどう利用するかについて、盲学校に依頼したアンケートによる調査を行った。アンケートの集約から、多くの盲学校が公園利用を望んでいることが明らかになった。公園を利用するためには盲学校の近くに公園があること、そして公園までの経路の安全性などが重要な条件であった。盲学校の生徒に利用される公園の特徴は、公園の広い空間、公園の位置がわかりやすいこと、そして公園に多くの植物があることなどである。さらに、盲学校の生徒にとって利用しやすい公園までの距離は約500mであることが明らかになった。

1. はじめに

近年、高齢者や身体障害者にも生活しやすい都市づくりの必要性が叫ばれ、それに伴い街路空間や公共施設等の地域環境も見直され改善されつつある。公園緑地の分野でも「緑の空間」のバリアフリー化やユニバーサルデザイン化も進んでいる。障害者の外部空間づくりの先駆的な取り組みもはじまり、計画・デザイン・整備方針のガイドラインとして「バリアフリー緑の空間計画」¹⁾・「人にやさしい公園づくり」²⁾・「長寿社会に対応する公園」³⁾・「バリアフリーの景」⁴⁾やバリアフリー緑地環境設計マニュアルの「ケアガーデン」⁵⁾、公園施設の計画・手法についてまとめた「みんなのための公園づくり」⁶⁾等がある。しかし、これらは高齢者や肢体不自由者の車椅子による公園利用を想定した整備項目が多く、視覚障害者の利用を主にした整備方針は少ない。

視覚障害は環境の変化等の情報を得にくく、行動が著しく制限されるため、このようなハンディへの施策が重要である。しかし、実際には基礎的資料も極めて少ないのが実状である。これまでの研究で、視覚障害者の戸外活動への志向性は高く、集団的な遊びで占められていること⁷⁾、また組織的で活動的なクラブの入部率が高いことや彼らの日常の遊びは基本的には盲学校や盲人施設での友人との交友を伴って展開していることを報告した⁸⁾。本研究は、これら前例を参考にしながら盲学校に近接した公園の利用に焦点を当てて、その公園利用の現況を明らかにするものである。視覚障害者が公園を日常的に利用できるようになるための資料や、公園の利用状況などの掌握を試みた。その結果から配慮を必要とする事柄について考察をした。

2. 調査方法

調査は全国の既設盲学校71校のすべてを対象とし、盲学校としての公園の利用状況と既存公園に対する要望等についてのアンケートを行った。アンケートは現地での面談と郵送によって回答を得た。また地図上で、それぞれの盲学校を中心として1km圏内に含まれる公園を、「隣接」、「100m圏内」、「100～250m圏内」、「250～500m圏内」、「500m～1km圏内」の距離ごとに分け、リストを作成した。そして、盲学校が利用している公園と照合し、利用状況についての情報を得た。地図上で位置のわからない公園については、各市町村へ問い合わせて補った。調査内容については、宮崎県立盲学校から多くの助言を頂いた。

調査は、1999年9月～12月に実施し、調査対象校71校から100%の回答を得た。

表－1 盲学校の在籍者数と公園利用の有無

在籍者数	利用する	利用しない	合 計
1～20人	7	1	8
21～40人	15	7	22
41～60人	16	6	22
61～80人	8	2	10
81～100人	5	1	6
101～200人	3	0	3
合 計	54	17	71

(単位:学校数)

3. 調査結果

(1) 盲学校の公園利用の実態

表－1は、調査校の在籍者数と公園利用の有無を示したものである。在籍者が21～40人と41～60人の学校が最も多い。101人以上の児童・生徒が在籍する盲学校は少ない。この中で公園を利用している学校は54校で、残り17校は利用していなかった。公園利用と盲学校の在籍者数の関係をみると、児童・生徒数が多い盲学校も公園を利用しており、利用する率について、利用状況と在籍者数には密接な関係はみられないが、利用しない率では在籍者数が20人以下か60人を越えて多くなるにつれて減少する傾向がみられる。

①公園までの距離と利用頻度

公園を利用している盲学校54校に対し、学校から利用する公園までの距離と、公園の利用頻度についてたずねた結果を表－2に示す。ほとんどの盲学校が利用する公園は「250m圏内」、「500m圏内」であり、次いで「1km圏内」、「1km以上」と回答した。公園を利用している盲学校の説明によると“約250mの距離は5～10分程度で移動できる”ということである。当初利用されると考えた、隣接・100m圏内の近距離にある公園の利用は少ない。

利用頻度については、〔週に数回、週に1回〕と頻繁に利用している学校は31校、〔年に数回・年に1回〕と利用の少ない盲学校は23校、これらの中間の利用頻度にあたる〔月に1～2回〕の利用を行う盲学校は28校である。

距離と利用頻度の関係を見ると、「月に1～2回」以上の頻繁

*南九州大学園芸学部造園学科

に利用される公園は250～500mがほとんどである。また、年に1回、数回の公園利用では遠距離の公園になり、距離と利用頻度で二極化する傾向にある。

②公園の利用時間と利用時間帯

公園の利用時間を

表-3に示す。この結果から、公園を利用する時間は「30分程度」と「1時間程度」が多い。また、公園を利用する時間帯をみたのが表-4であるが、最も多いのは「授業中」である。この場合、児童・生徒は授業時間内に学校と公園を往復しなければならないため、当然利用時間は30分、または1時間と限られてくる。

③公園の利用形態

公園の利用形態をみたものが表-5である。公園利用の内容は小学部、中学部、高等部と高学年になるに伴いその種類が少なくなっている。小学部、中学部、高等部に共通して多いのは、「遊具遊び」、「散歩」、「歩行訓練」である。これ以外に、小学部は「自然観察」や「植物採集」など公園を遊びの場、または自然に触れて親しむ場として主に利用している。中学部、高等部では小学部のような遊びや観察が中心となった利用は減り、特に高等部では「ソフトボール」や「バスケットボール」、「グランドゴルフ」など、多様な運動をするための利用が増えている。

表-2 公園までの距離と公園の利用頻度（複数回答）

	週に数回	週に1回	月に1～2回	年に数回	年に1回	合 計
隣接	2	0	0	0	0	2
100m圏内	2	1	0	0	0	3
250m圏内	8	5	6	1	0	20
500m圏内	6	4	13	1	0	24
1km圏内	1	0	4	10	1	16
1km以上	0	2	5	8	2	17
合 計	19	12	28	20	3	

(単位:学校数)

表-3 公園の利用時間（複数回答）

(1)30分程度	24
(2)1時間程度	24
(3)2時間程度	9
(4)半日	7
(5)1日	1
(6)その他	1

(単位:学校数)

表-4 公園を利用する時間帯（複数回答）

(1)放課後	7
(2)昼休み	1
(3)日祭日	1
(4)長期休暇	1
(5)授業中	46
(6)その他	9

(単位:学校数)

表-5 公園の利用形態（複数回答）

	小学部	中学部	高等部
遊 び	遊具遊び(36) ボール遊び(3) ゲーム遊び(2) 水遊び(2) アスレチック遊び ボランティアとの遊び その他の遊び	遊具遊び(13) ボール遊び(2) その他の遊び(2)	遊具遊び(5) その他の遊び
運 動	歩行訓練(養護訓練)(16) 散歩(15) 体育の授業(3) 遠足(3) 野球(2) 持久走 一輪車 体力づくり	歩行訓練(養護訓練)(14) 散歩(12) 遠足(3) 体育の授業(2) 持久走(2) 野球 体力づくり	歩行訓練(養護訓練)(8) 散歩(7) 体育の授業(4) 遠足(2) 野球 ソフトボール バスケットボール グランドゴルフ フライングディスク 体力づくり
観 察 見 学	自然観察(9) 理科の授業(観察)(4) 植物採集(落ち葉ひろい等)(4) 図工の授業(スケッチ)(2) 社会の授業(社会見学)(2) 花見(2) 自然散策 公園施設の探検	自然観察(6) 理科の授業(観察)(2) 植物採集 図工の授業(スケッチ) 汽車見学 花見 自然散策	花見(2) 自然観察 理科の授業(観察) 汽車見学
その他	休憩(歩行訓練の目的地)(4) 学校行事(2) イベント参加 避難訓練 清掃活動 公園利用についての学習 自立活動 レクリエーション 体験学習 生活の授業 家庭科の授業	休憩(歩行訓練の目的地)(3) 学校行事 イベント参加 避難訓練 清掃活動 奉仕活動 自立活動 野外授業 俳句づくり 生活の授業	休憩(歩行訓練の目的地)(2) 学校行事 イベント参加 避難訓練 レクリエーション 奉仕活動 自立活動 野外授業 俳句づくり

注) ()内は回答校数

④利用している公園の特徴

利用している公園の特徴を表－6に示した。盲学校が利用している公園は「遊べる場所が広い」、「遊具が多い」等、遊びの空間をもつことが特徴となっている。また「公園の位置がわかりやすい」、「植物が多い」という回答も多かった。

表－6 利用している公園の特徴（複数回答）

(1)遊具が多い	20
(2)芝生がある	12
(3)遊べる場所が広い	26
(4)植物が多い	18
(5)公園の位置が分かりやすい	21
(6)水の流れがある	6
(7)その他	13

（単位：学校数）

⑤公園利用に際しての不満

表－7は公園を利用する上での不満であるが、「遊具が少ない」、「遊べる場所が狭い」が多く回答された。その他、危険を伴う障害物等が不満の対象となっている。

表－7 公園利用に際しての不満（複数回答）

(1)道具が少ない	23
(2)順路となるものがない	5
(3)障害物がある	6
(4)遊べる場所が狭い	11
(5)スポーツができない	5
(6)人とぶつかる	1
(7)木や枝が突き出して危ない	4
(8)地面が滑る	0
(9)一人では何もできない	3

（単位：学校数）

⑥公園を利用しない理由

公園を利用していない盲学校17校に、その理由をたずねた結果、ほとんどの学校は「近くに公園がない」、「公園までの移動に危険がある」と回答した（表－8）。これらの利用しない理由が解決した場合について、17校中16校が公園利用を希望している。このとき、利用に望ましい距離として、「100～250m」、「250～500m」、「隣接」を多くあげた（表－9）。また、考えられる主な利用目的は表－10のとおりである。「遊具利用」が最も多く、「自然観察」、「運動」、「散歩」等、現在公園を利用している盲学校の利用内容と共通している。

表－8 公園を利用しない理由（複数回答）

(1)近くに公園がない	11
(2)遊ぶ場所が狭い	1
(3)公園までの移動に危険がある	7
(4)危険な遊具等が多い	1
(5)他の利用者とのトラブルに不安があ	0
(6)遊び仲間がいない	1

（単位：学校数）

表－9 利用したい公園までの距離（複数回答）

(1)隣接	5
(2)100m以内	3
(3)100～250m	7
(4)250～500m	7
(5)500m～1km	2

（単位：学校数）

表－10 利用する場合の主な利用目的（複数回答）

(1)遊具利用	13
(2)運動	7
(3)散歩	7
(4)休憩	5
(5)自然観察	9
(6)体験学習	7
(7)その他	1

（単位：学校数）

⑦公園に望むこと

盲学校71校に対する公園への要望調査の結果を表－11に示す。「施設の誘導をわかりやすくしてほしい」が最も多く回答された。「安全な遊具を増やしてほしい」、「公園周辺の安全性の配慮をしてほしい」等、施設や周辺環境への安全の配慮も望んでいる。

表－11 公園への要望（複数回答）

(1)大きな広場をつくってほしい	3
(2)安全な遊具を増やしてほしい	13
(3)施設の誘導をわかりやすくしてほしい	15
(4)公園周辺の安全性を配慮してほしい	10
(5)匂いのする花木を植えてほしい	11
(6)休養施設がほしい	9
(7)その他	3

（単位：学校数）

⑧公園利用の際の障害物

公園を利用するときに危険と思われる障害物を、表－12に示した。この結果から「自転車」（15校）が最も多く、次いで「犬」や「木や枝」等があげられた。「その他」出入口の柵、斜面、段差、広い空間に突然現れる構造物の危険性があげられた。事前にその存在が予知しにくいものや、急激な状況変化に対応が難しくなることが示されている。

表－12 公園利用の際の障害物（複数回答）

(1)ベンチ	1
(2)人	0
(3)木や枝	5
(4)犬	7
(5)自転車	15
(6)遊具	3
(7)その他	5

（単位：学校数）

⑨設問以外の意見・要望

アンケートの項目以外で述べられた、公園についての意見・要望を類似した内容ごとにまとめ、その結果を表-13に示した。施設と歩行空間への要望は多く、点字誘導ブロックや立体模型の案内板などの視覚障害者を対象とした安全性の配慮や利用案内・誘導のわかりやすさが求められている。その他に放置自転車やゴミ収集場などの周辺状況の整備に関すること、清掃や樹木管理など公園内部の管理に関することなど健常者が利用する場合においても不都合となると思われる項目があげられた。

(2) 盲学校周辺に位置する公園の現状

調査対象とした盲学校周辺に設置されている公園の数と種類、利用状況について検討した。表-14は盲学校を中心として半径1km圏内にある公園の数とその利用状況を示したものである。1

km圏内にある公園は778ヶ所で、盲学校はその8%にあたる66ヶ所を利用している。盲学校からの距離でみると「隣接」または「100m圏内」にある公園は10ヶ所と極端に少ないが、半数が利用されている。距離が離れるにつれて、公園数は増えるが利用率は小さくなる。実数的には利用されている公園66ヶ所のうち「250～500m圏内」が24ヶ所、「100～250m圏内」が20ヶ所と多い。また、ほとんどの盲学校において250m圏内に少なくとも1ヶ所は公園が設置されている。

表-15は盲学校が利用している公園の種別を示したものである。設置数の多い住区基幹公園が7割以上利用されていることがわかる。また、神社や寺を利用している学校があるが、近接に公園が設置されていないわけではない。

表-13 設問以外の意見・要望

(1) 公園までの経路について	(3) 公園内の歩行空間について
<div><ul style="list-style-type: none">・ 自転車（放置のものを含む）と歩行者の通路を区別する・ 歩道の幅員を大きくする・ 点字誘導ブロックを敷設する</div>	<div><ul style="list-style-type: none">・ 階段ではなく、スロープを設置する（5）・ 点字誘導ブロックを敷設する（4）・ 手すりを設置する（4）・ ゴミ・動物のフンの処理を行う（4）・ 出入口や施設の位置を点字表示で案内する（3）・ 立体模型で案内する（2）・ ランドマークを設置する（2）・ 園路とそれ以外の部分を素材や色の違いで知らせる（2）・ 段差を低くする（2）・ 突然の状況の変化をなくす（2）・ 大きな石は置かない（2）・ 音声で案内する・ 点字誘導ブロック上には障害物を置かない・ 園路は単純な形にする・ 傾斜をなくす</div>
(2) 施設について	(4) 公園内及び周辺環境について
<div><ul style="list-style-type: none">・ 児童の体型にあった遊具を設置する（2）・ 各施設に点字表示で利用案内する（2）・ トイレ（身障者用を含む）を設置する（2）・ 日除けや雨除けになる休養施設を設置する（2）・ 施設位置は土地の起伏の変化で知らせる・ 自動販売機に点字表示する・ 樹木に点字表示した名札をつける・ 池や水の流れを設ける・ 水飲み場を設置する・ 実のなる木を植える・ 触察できる動植物を設ける・ 車いすの駐車場を設置する・ 展示物を設ける・ 複合遊具を設置する・ アスレチックを設置する・ 遊具は木製にする・ 体を大きく動かせる遊具を設置する・ 遊具は芝生や柔らかい土の広場に設置する・ 遊具の数を増やす・ 遊具の数を減らす・ トイレは出入口の側にそばに設置する・ トイレの水流はセンサーではなく、レバーのものにする・ 水道は背の低いものを設置する・ 車止めをなくす・ 池の周囲に柵を設ける・ 施設の扉は引き戸にする・ 広場は水はけをよくする</div>	<div><ul style="list-style-type: none">・ 自然が多い（3）・ 壊れたり、老朽化した施設は修理または撤去する（3）・ 砂場・トイレの清掃を行う（3）・ 交通量の多い道路のそばに設置しない（2）・ 盲学校の校庭に設置する（2）・ ホームレスの出入りを規制する（2）・ 公園周辺にゴミの収集場を設けない・ 点字誘導ブロック上の車の駐停車を規制する・ 樹木管理を行う</div>
	(5) その他
	<div><ul style="list-style-type: none">・ ユニバーサルデザインを取り入れる（2）・ 様々な体験活動を行えるようにする・ 視覚障害者だけでなく、視覚障害とその他の障害を併せ持つ重複障害者への配慮も必要である</div>

注）（ ）内は回答校数

表-14 盲学校を中心として半径1km圏内にある公園の数と利用状況

	隣接	100m圏内	100～250m圏内	250～500m圏内	500m～1km圏内	合計
配置公園数	4	6	73	165	530	778
利用公園数	2	3	20	24	17	66
利用率	50%	50%	27%	15%	3%	8%

表－15 盲学校が利用している公園の種別

種類	種別	配置公園数	利用公園数	利用率
基幹公園	住区基幹公園	686	49	74.2%
	都市基幹公園	10	2	3.0%
特殊公園		18	3	4.5%
広域圏公園		1	1	1.5%
緑地		37	2	3.0%
その他の公園・ 緑地など	保存緑地	5	0	0.0%
	その他の緑地	1	0	0.0%
	保全地区	1	0	0.0%
	森林公園	1	1	1.5%
	墓園	1	0	0.0%
	特別史跡	1	1	1.5%
	条例設置公園	1	1	1.5%
	広場	7	0	0.0%
	運動場	2	0	0.0%
	個人所有	1	1	1.5%
	神社	3	3	4.5%
	寺	1	1	1.5%
	その他	1	1	1.5%
合計		778	66	100%

4. 考察

盲学校の公園利用の実態を調査した結果、約3／4の盲学校が公園を利用していた。利用している公園は学校からの距離は500mまで、利用時間は30～60分程度であった。盲学校にとって公園は訓練や授業の一環とすることが多いこともわかった。また、公園を利用する場合、歩行訓練の目的地としていることも多いため、公園までの経路の整備も重要であると思われる。公園を利用しない理由としては、近くに公園がないとする回答が多かったが、調査の結果では調査対象とした盲学校のほとんどの近接に公園が設置されていることが示された。そのことから、公園の配置状況が十分に知られていないか、近接の公園が利用しにくい状況にあることが考えられる。盲学校周辺の公園の現状を調べた結果では、住区基幹公園が利用されている主な公園であった。盲学校の公園利用を促進するためには、盲学校の利用しやすい位置にある住区基幹公園を整備する必要があるといえる。

盲学校に対して公園利用における意見・要望をたずねた結果、公園内部の施設や周辺環境に対する回答を得られた。施設に対しては点字誘導ブロック等の誘導施設や安全な遊具の設置や整備への要望が多かった。施設への要望の多くは、すでにガイドライン等に表示されているが、利用の主となる住区基幹公園においては十分に行われていないといえる。その他に公園の清掃や施設修理など、通常の維持管理が不十分であるとの意見もあった。これら

はほかの身体障害者や健常者の利用においても改善が必要であり、公園の設置以外に維持管理の体制についても考慮する必要があるといえよう。また、公園の周辺環境や公園までの経路に関する要望もあったが、これらの改善については地域住民の理解や自治体の協力が不可欠と思われる。

5. おわりに

本報告では盲学校の公園利用についての現状と問題点を明らかにした。盲学校での公園利用は日常的ではない。それは障害者が利用しやすい公園緑地としての整備が不十分であることにも起因している。視覚障害者に配慮した公園整備については公園内部の施設等の整備のみならず、公園周辺部の環境整備も重視すべきことが示唆された。視覚障害者をはじめとする障害者が利用できる公園整備においては、彼らの利用上の不具合を解消する必要がある。それは障害の種類や程度によって様々である。今後は、彼らの意見を反映した公園の整備のためのより詳細な調査研究を重ねる必要がある。また、その公園は健常者と障害者が共に利用できるものとすべきである。そうすることによって公園はコミュニティ形成の場、クラブやサークル活動など、さまざまな交流のきっかけの場となり、彼らの公園利用はいっそう高まっていくものと思われる。

参考文献

- 1) バリアフリー緑の空間計画検討委員会 (1998) : バリアフリー緑の空間計画 : (社)日本造園学会, 252pp
- 2) 浅野房世 (1996) : 人に優しい公園づくり : 鹿島出版会, 191pp
- 3) 大熊由紀子ほか (1997) : 長寿社会に対応する公園 : 公園緑地 58(3), 76pp
- 4) 田口泰彦ほか (1996) : バリアフリーの景 : ランドスケープのデザイン NO 3 : マルモ出版, 54-128
- 5) 越川秀治 (1998) : ケアーガーデン : 都市文化社, 180pp
- 6) 建設省都市局公園緑地課 (1999) : みんなのための公園づくり : 日本公園緑地協会, 162pp
- 7) 永松義博 (1985) : 全盲者の戸外活動に関する研究 : 造園雑誌48(5), 217-221
- 8) 永松義博 (1992) : 盲学校生徒の余暇活動に関する研究 : 造園雑誌55(5), 265-270

Summary : In order to know how the blind students use the parks close to the school for the blind, investigations were carried out using questionnaires returned from the schools for the blind in Japan. From putting together the questionnaires, it became obvious that students in the most of the schools want to utilize the parks. For utilizing the parks, the location of parks close to the school, and the safety of the route to the park were the important conditions. The characteristics of the parks well utilized by the students were wide space in the park, the convenient route to the park, and many plants in the park. In addition, the convenient distance to the park for the blind students was found to be approximately 500 m.